博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）　　菅原　睦

学位申請者　菱山　湧人

論　文　名　タタール語における人称標識の出現傾向について
　　―コーパスに基づいた研究―

結論

菱山湧人氏から提出された学位請求論文「タタール語における人称標識の出現傾向について　―コーパスに基づいた研究―」について、論文審査と口述による最終試験の結果、審査委員会は全員一致で博士（学術）の学位を授与するにふさわしい研究であるとの結論に達した。

なお、審査委員会は菅原を主査に、副査として本学の野元裕樹准教授、同じく本学の島田志津夫講師、サハ語をはじめとするチュルク諸語を専門に研究されている新潟大学の江畑冬生教授、主任指導教員である風間伸次郎教授を加えた５名で構成された。

論文の概要

本論文はタタール語（チュルク諸語北西語群）および他の代表的なチュルク諸語を対象に、コーパスを用いた定量的調査を主とした調査を行い、１）タタール語における人称標識の出現傾向を明らかにし、２）タタール語における人称標識の出現傾向を他のチュルク諸語と比較して、タタール語のチュルク諸語における位置づけを行った論文である。

本論文は大きく「序論」、「本論」、「結論」に分けられている。

「序論」では、本論文の概要について述べた後、第 1 章「タタール語概説」で、本稿の問題を理解するために必要な背景知識としてのタタール語の概説を行っている。第 1 章ではさらに本論文の調査対象である人称標識およびそれが現れうる領域の文法全体における位置づけと、本論文で用いる枠組みや用語の一部とその定義を示している。次に、第 2 章「人称に関する通言語学的研究」では、まずタタール語における人称標示が通言語的にどのようなタイプに該当するかを示したうえで、後の考察（主に第 5 章）でのタタール語における人称標識の出現傾向を通言語的に位置づける際の参考にするために、人称に関する通言語学的研究の記述をまとめている。

「本論」は、第一部「タタール語における人称標識の出現傾向」と第二部「チュルク諸語におけるタタール語の位置づけ」からなっている。

第一部「タタール語における人称標識の出現傾向」は、第 3 章「先行研究（第一部）」、第 4 章「調査の対象と方法（第一部）」、第 5 章「調査結果と考察（第一部）」からなっ

ている。第 3 章では、タタール語の人称標識の出現傾向に関する先行研究の記述が不十分であることから、コーパスを用いた定量的調査を中心とした調査を行い、タタール語における人称標識の出現傾向を明らかにする必要があることを述べている。第 4 章では、調査対象とした標識や領域を示し、調査方法としてコーパス調査とインフォーマント調査を行ったことについて述べている。第 5 章では、調査結果を示し、タタール語の人称標識の出現傾向とそれに影響している要因を挙げ、考察を行っている。

所有人称接辞に関する調査の結果からは、主に、１）人称・数、２）主要部要素の種類、３）従属部と主要部の距離、が所有人称接辞の出現頻度に影響していることを示した。より具体的には、１）一人称複数標識の出現頻度が有意に最も低く、二人称単数標識の出現頻度が有意に最も高いこと、２）後置詞句や、後置詞的に機能する名詞が主要部である名詞句で所有人称接辞の出現頻度が有意に低く、動名詞や非定形コピュラ ikänlek が主要部である名詞節で所有人称接辞の出現頻度が有意に高いこと、３）従属部と主要部が隣接している場合に所有人称接辞の出現頻度が有意に低く、隣接していない場合に所有人称接辞の出現頻度が有意に高いこと、を示している。

述語人称標識に関する調査の結果からは、述語人称標識の出現傾向が主に、１）標識の種類、２）主要部（述語）の種類、３）節の種類、によって異なることを示した。より具体的には、１）所有型の標識に比べ、代名詞型の標識の出現頻度が低いこと、２）述語人称標識の出現頻度は、述語が非動詞述語である場合に有意に低く、動詞述語である場合に有意に高いこと、非動詞述語文では、名詞述語よりも形容詞述語（特に感情やモダリティを表わす形容詞）で有意に高いこと、動詞述語文では、述語が意図形 -mAKčE、（結果状態を表わす）完了形 -GAn の動詞である場合に有意に低いこと、３）非動詞述語文では =mE 疑問文で述語人称標識の出現頻度が特に低いこと、動詞述語文では主節に比べて引用節で述語人称標識の出現頻度が有意に低いこと、を示した。これらの調査結果について、１）所有型の標識に比べて代名詞型の標識の出現頻度が低いのは、所有型の標識の方が文法化の度合いが高いためであること、２）「動詞＞形容詞＞名詞」の傾向は意味論的述語階層が示す通言語的な傾向に沿っていること、３）非動詞述語を持つ =mE 疑問文で述語人称標識の出現頻度が特に低いのは、疑問モダリティとは相性が悪いためであること、動詞述語文では主節に比べて引用節で述語人称標識の出現頻度が低いが、これは主節主語の視点が関係しているためであること、を主張している。

第二部「チュルク諸語におけるタタール語の位置づけ」は、第 6 章「先行研究（第二部）」、第 7 章「調査の対象と方法（第二部）」、第 8 章「調査結果と考察（第二部）」からなっている。第 6 章では、チュルク諸語の人称標識の出現傾向に関する先行研究の記述も不十分であることから、コーパスを用いた定量的調査を中心とした調査を行い、主なチュルク諸語における人称標識の出現傾向を明らかにする必要があることについて述べている。第 7 章では、第 4 章と同様に、調査対象とした標識や領域を示し、調査方法としてコーパス調査とインフォーマント調査を行ったことについて述べている。第 8 章では、調査結果を示し、人称標識の出現傾向に関して、タタール語のチュルク諸語における位置づけを検討し、考察を行っている。

調査対象とする言語は、トルコ語（南西語群）、ウズベク語（南東語群）、カザフ語（北西語群）、チュヴァシ語（オグル語群）とし、それぞれの言語でタタール語の人称標識に対応する標識の出現傾向を調査した。

所有人称接辞に関する調査の結果からは、１）タタール語における所有人称接辞の全体的な出現頻度は、トルコ語、ウズベク語、カザフ語よりは有意に低く、チュヴァシ語よりは有意に高いこと、２）トルコ語、ウズベク語、カザフ語、チュヴァシ語においても、所有人称接辞の出現頻度が人称・数によって異なっており、一人称複数標識の出現頻度が有意に最も低いというタタール語と同様の傾向が見られること、３）主要部が後置詞的に機能する補助名詞である場合に所有人称接辞の出現頻度が低いというタタール語で見られる傾向が、トルコ語、ウズベク語、カザフ語では見られないこと、４）トルコ語、ウズベク語、カザフ語の関係節名詞句と名詞節では所有人称接辞がほとんどの場合現れること、を示している。

述語人称標識に関する調査の結果から、トルコ語、カザフ語の非動詞述語文（名詞述語文・形容詞述語文）でも述語人称標識が現れない例が見られるが、タタール語に比べて有意に少なく、容認度も低いことを示している。このことよりタタール語の非動詞述語文（名詞述語文・形容詞述語文）における述語人称標識の出現頻度は、トルコ語、カザフ語より低いと言えるとしている。先行研究の記述および調査結果から筆者は、述語人称標識の文法化の度合いの違いが、言語による述語人称標識の出現頻度の差と関係している可能性がある一方で、述語人称標識の文法化の度合いが同程度であっても、言語間や同一言語内で述語人称標識の出現頻度に差が見られる場合もあると述べた。

「結論」の章は、第 9 章「言語接触の影響の可能性」と第 10 章「本稿のまとめと今後の課題」からなっている。第 9 章では、タタール語における人称標識の全体的な出現頻度が Common Turkic に属する主な言語（トルコ語、ウズベク語、カザフ語、サハ語）より低いことが、ロシア語などの周辺言語との言語接触によるものである可能性を提示している。第 10 章では、本稿の議論をまとめ、今後の研究課題を示している。

審査の概要及び評価

上記のように菱山湧人氏の博士論文は、丁寧で精密なコーパス調査とインフォーマント調査によって新しい知見を多く示しつつ、タタール語における人称標示の特徴を言語内の体系的な観点から、さらに対照言語学的な観点から明らかにすることに成功している。

本論文の内容に関して、各審査委員からさまざまな評価がなされた。各委員より特に高く評価されたのは、以下の点である。

・タタール語のみならずいくつものチュルク諸語のコーパスを駆使し、帰納的なかつ定量的なデータによって人称標識の出現状況とその要因を解明した。
・通言語学的な先行研究にも目を配り類型論的な知見も踏まえて問題の現象を扱っている。
・他のチュルク諸語との対照を行って、タタール語での人称標識の出現が示している状況のチュルク諸語全体における位置づけを行っている。

・地図や背景的知識としての概説も含め、内容・形式共によく整っている。

もちろん本論文には改善すべき点も残されている。最終試験において、審査委員からいくつかの質問、要望が出された。その指摘のうち、重要な点としては以下のようなものをあげることができる。

・研究範囲や対象を論文全体の方向性に合わせて絞っている反面、記述研究や類型論の分野において大きな問題となる点の解明を回避している面がある。

・言語による述語人称標識の文法化の度合いの違いを問題にしているが、その度合いを測る方法が明示されていない。

・先行研究の言説を十分に吟味せずにそのまま採用していると思われるところが見られる。

・本論文が扱った現象は、一般言語学的にみてどういう現象として位置づけられるのか？一致でなく一種の doubling ではないかという点について、一般言語学的に再考すべきではないか。

各委員からのこれらの指摘も、本論文の価値を高く評価した上で今後のさらなる研究の進展を期待したものであり、建設的な意見として提言を行っているものといえる。

最終試験における質疑においても、申請者の応答は的確で、委員たちとの間で学問的に興味深い議論が行われた。その過程から、申請者が指摘された問題点をよく自覚し、今後それらを解明していくのに十分な学識と強い意欲を持っていることが確認された。タタール語文法の記述研究の進展、タタール語が属するヴォルガ・カマ言語連合の地域特徴の解明、さらにはチュルク諸語に属する諸言語の記述研究・対照研究・類型論的な観点からの研究に関して、申請者の今後の活躍が十分に期待できる。

審査委員会は、学位請求論文の内容、ならびに最終試験（公開審査）の結果より総合的に検討した結果、全員一致で申請者菱山湧人氏の学位請求論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであるという結論に達した。